

令和7年度前期終業式校長挨拶

全校生徒の皆さん、こんにちは。今回は東京で開催された世界陸上に出場した3人の選手についてお話しします。

1人目は、男子35km競歩において、見事銅メダルを獲得した勝木隼人選手についてです。勝木選手は、元々長い距離を得意としており、50km競歩を得意としていました。ところが、東京五輪を最後に50kmは廃止され、代わりに導入された35kmでは、課題のスピード不足により苦戦が続いていました。このことは、所属先からの引退勧告まで引き起こしてしまいます。それでも勝木選手は諦めませんでした。厚底シューズに履き替える等の工夫を重ね、結果を出し、見事現役続行を勝ち取ります。現役を続けた結果が、今回の銅メダルです。本番のレースにおいても、一時は表彰台圏外の4位に脱落しながらも、あきらめずに奮闘し、見事3位になりました。どんな逆境においても、決して諦めることなく、自分のできることを精一杯やり続ける。勝木選手は諦めないことの大切さを教えてくれています。

2人目は、男子棒高跳びで世界記録を出し、金メダルを獲得したスウェーデンのデュプランティス選手です。金メダルは取って当然。世界記録も間違いなく出るだろうと注目を浴びていた選手です。その重圧はとてつもなく大きなものだったでしょう。そうした中、見事に結果を出した精神力の強さには感服しました。このことで、私が担任として関わったある高校生のことを思い出しました。彼女は模擬試験において、常に志望校の合格判定がAとなっていました。誰もが彼女は絶対に合格すると考えていました。同級生からも「いつもA判定でいいな」という言葉をかけられていました。ある日、私は次のように聞きました。「いつもA判定だなんて、逆につらいんじゃないか。」彼女は、「その通りです」と話してくれました。それから時間をかけて、周りからの期待の大きさとその重圧について話してくれました。誰もが羨むような能力をもっている、重圧は確かにあるのです。そして、その重圧は、時に耐えがたいものとなるのです。因みに彼女は、見事第一志望校に合格しました。重圧に耐えてのことでした。

また、デュプランティス選手のライバルたちも素敵でした。ギリシャのカラリス選手は、世界記録に挑むデュプランティス選手を小型扇風機でサポートしていました。たった今、自分を打ち負かした選手を応援するその姿は、一流のアスリートの素晴らしい人格と利他の心を示していました。またその他のライバルたちも、世界記録への挑戦を見守り、達成した時にはデュプランティス選手に抱き着いて、喜びを表していました。利他の心を示す素晴らしいエピソードだと思います。

3人目は、110mハードルで5位入賞を果たした村竹ラシッド選手です。パリ五輪で5位入賞を果たした村竹選手は、東京世界陸上でメダルを獲得することを目標に、海外での実戦経験を積み、冬季はスプリント強化や土台作りに励む等、ひたむきに努力してきました。自信をもって臨んだ世界陸上。結果は5位でした。「何が足りなかったんだろう。何が今まで間違っていたんだろう。パリ五輪が終わってからの1年間、本気でメダルを目指して練習してきた。メダルをとってみんなと一緒に喜びたかった。」レース後の彼の言葉です。今まで日本人が決勝の臨んだことのない種目で、連続で世界の5位です。素

晴らしい成績です。しかもパリ五輪では3位との差が0.12秒だったのが、今回はわずか0.03秒に縮まっていたのです。村竹選手の涙は、本当に本気で一つのことに打ち込んだ者だけが流せるものです。また、いつの日かきっと目標を達成することを予感させる涙でした。あんな涙を流せる程、努力したことに敬意を表します。皆さんも本気で一つのことに取り組んでみませんか。

今回は世界陸上から学んだことについてお話ししました。このように、学ぶ機会はどこにでもあります。学ぶことができるか。その鍵は、一人一人の心の持ち方にあると思います。今年度も残り半分となります。皆さんに多くの学びがあることを期待しています。

令和7年9月30日

市立札幌平岸高等学校長 中井 勝広